

日本社会事業大学同窓会 栃木県支部

会報 いずみ 第10号

栃木県支部事務局：真岡市高勢町 2-248-5 菊池方 TEL090-2321-0902

発行 令和4年12月

令和4年度総会開催 新会長に檜山浩氏就任



令和4年11月12日、日本社会事業大学同窓会栃木県支部の総会が開催され、10名の会員が参加されました。

今総会において、岩崎俊雄会長は勇退され、檜山浩氏（学部25期）が会長に就任されました。

『感謝を込めて』

〈 学部 10 期 岩崎俊雄 〉

コロナ禍にあって、延び延びになっていた同窓会栃木支部総会を開催し、新たな体制が承認されました。新会長には檜山浩氏が就任されることになり、事務局長にお任せの何もできなかった会長でしたが、それでも肩の荷が下りました。檜山会長以下新役員の皆様にはご苦勞をおかけすることになるかとも思いますが、なにとぞよろしく願いいたします。

右も左も分からない栃木県に移り住み、令和4年4月で丁度50年になりました。栃木市に開設される知的障害児通園施設が私の現場実践の始まりです。学生時代には身体障害者の皆さんとも活動を共にしてきましたが、施設実習の経験もなく、卒業後も東京都の行政職員で人事を担当していましたので、知的障害児とお付き合いするのははじめてでした。



加えて、その通園施設は、種々の事由により内定職員が開設直前になり全員辞退することになり、児童指導員の任用資格を有する私が現場の指揮を執ることになりました。さらに、施設長も実質的には欠員状態で、対外的な業務も引き受けざるを得ない立場でもありました。

このような事情から、職員確保が当面の課題で、職員採用について関係大学等をお願いしたほか、社大に赴き後輩である金澤、坂下両氏に何とか助けてもらって開園することができました。その通園施設は、開園までに時間を要したことから、開園直後に措置が打ち切られる18歳になる児童もおりました。『普通の子と同じように自宅から通わせて教育を受けさせたい』と願っていた保護者の期待が打ち砕かれる思いであったろうと思います。

加えて、保護者が望む施設を整備し続ける、と明言されていた理事長が整備資金確保の目処が立たずに、退任する事態に至りました。当時のPTA会長は「岩崎を信じ、新たな法人を創設して成人施設を建設しよう」と檄を飛ばし、保護者の先頭に立って活動を開始しました。

このような状況下において、当時岩舟町議会議員であった義父も会長の方針に応じざるを得ず、自ら所有していた農地を施設建設用地として提供することを決断しました。当時は、コメの生産調整等の動きはありましたが、先祖伝来の農地を手放すなどは想定外のことで、「婿に騙されているのではないか」との噂を耳にしたこともありました。

一方、伝手のあまりなかった中で、利用児の関係で面識があり、安蘇福祉事務所長でもあった田島さんを訪ね、相談にのっていただきました。すぎのこ会の基本理念である『利用者が生きがいの持てる、地域と密着し地域社会と交流の持てる、一貫した福祉を保障する施設』は、田島先輩のアドバイスによって樹立したものです。さらに、本庁厚

生課の石川、矢口、大友の各氏を紹介され、支部同窓会とのお付き合いが始まりました。

当時の同窓会は、石川会長、大友事務局長以下県職員の集まりという実態で、支部会員名簿に数名の民間人の名前がありましたが、接触する機会は全くと言ってよいほどありませんでした。そんなこともあり、大友事務局長のお手伝いをさせていただくことになりました。

一方、社会福祉法人設立に向けた準備も本格化させ、昭和50年6月に法人認可を受け、翌年4月にすぎのこ会初の施設である精神薄弱者更生施設「すぎのこ学園」を開設しました。これを機に、50年近くにわたり法人の事務局長、常務理事、理事長として『地域包括支援システム：トータルサポートシステム』の構築に向け、馬車馬のごとく夢を追い続けてきました。

栃木に転居して50年、さらに後期高齢者となる年を迎え、理事長を辞任することを決意し、栃木県職員を辞して本会に入職していた長男、好宏が理事会において後継者として指名されました。私も、会長として本会の想いを繋ぐことにしました。

同窓会支部活動の動きは、石川さん、石橋さんに次いで私が会長に指名されました。また、事務局長は、大友さんに次いで私、そして菊池さんに引き継がれ、今日に至っています。

ところで、5年前の暮に、本部同窓会の大橋会長から電話を頂きました。「突然だが、本部同窓会長を引き受けてほしい」というのです。突然の話に驚きました。本部同窓会など眼中にありませんでしたので、大橋会長からのその後の依頼にも断り続けてきましたが、本部同窓会の石橋顧問の「大橋会長の依頼を断り続けることもできないだろうから、1期限りということを受けることにしてはどうか」とのアドバイスを受け、渋々承諾することにしました。

本部の役員の皆様のご支援、ご指導により1期限りという任期満了を迎えましたが、時期が悪くコロナ禍という状況の中で、再任という結果になってしまいました。次期総会において会長交代の人事案件を提案すべく関係各位にお願いをしているところです。

全く縁のなかった栃木に移り住み50年、そして後期高齢者となった今日、私を支え続けて頂いた多くの同窓生、特に栃木支部会員の皆様に、感謝、感謝の一言です。そして、『受けたご恩を石に刻み、生ある限りこの道を歩み続けたい』と思っている今日この頃です。長きにわたり公私ともにお世話になり、ありがとうございました。

会費納入・カンパのお願い

同窓会の円滑な運営のため、会費(2,000円)納入とカンパにご協力お願いいたします。

○振込口座 **筑波銀行 鹿沼支店 普通口座 1030143 菊池浩史**

*口座が変わりました。ご注意ください。

新役員体制について *任期 令和4年度～5年度

顧問 沼尾武次（本科5期）・石橋俊一（学部1期）・岩崎俊雄（学部10期）

会長 檜山浩（学部25期）

副会長 関久美子（学部29期）

幹事 菊地月香（院18期）・菊池浩史（学部34期）

監事 大石剛史（学部38期）・柴田雄太（学部46期）

令和3年度 決算報告

収入			支出		
会費	0	令和3年度は会費募集せず	通信費	20,580	会報関係
寄付金	0		印刷製本費	37,532	〃
補助金	30,000	母校同窓会補助金	消耗品費	2,200	〃
繰越金	88,908				
収入計	118,908		支出計	60,312	

収支差額 58,596円（令和4年度に繰越）

令和4年度 予算

収入			支出		
会費	50,000	2,000円@25人	総会費	20,000	会場費等
寄付金	1,000		会議費	5,000	役員会費用
補助金	30,000	母校同窓会補助金	通信費	30,000	会報等発送費用
繰越金	58,596		慶弔費	20,000	慶弔費用
雑収入	1,000		印刷費	50,000	会報等印刷費用
			消耗品費	10,000	用紙代等
			雑費	5,596	
収入計	140,596		支出計	140,596	

《本科5期 沼尾武次》

会報「いずみ」の10号を発行するとの報に接しなつかしくペンをとりました。

この6月私は卒寿を迎えた。市から祝辞と記念品、祝金が贈られてきた。嬉しくもあり、一面気はずかしさもある。鹿沼に生れ、居住してきたが、成人として働いてきたのは宇都宮市・栃木市・佐野市・氏家町などで、鹿沼市では働いたことはなかったなど思ったからです。住民としてはそれなりに働いたことはあったけどなどと思っています。

それにしても今年になって知人の訃報に接することが多い。

同窓の永年の友でも矢板の長井さん、近くでは永年にわたっておつき合いいただいた石月さんもこの世を去ってしまった。

石月さんとは、若い時代一緒の係で働いたこともあり、同窓生としても、永い間ご一緒に動いてきたことが多かった先輩です。若い頃県庁の裏山で詩を吟じ、書や絵画にも才を発揮した文化人でもありました。同窓会役員の相談をしようと電話したことが、病死の訃報を知ることになったことに因縁を感じます。

今となってはただ冥福を祈るだけ。

ゆっくりお休みください。

近況思いつきに駄文を弄しました。

同窓会各位のご活躍を多いに期待しております。



『人間とは何ぞや？』

《学部1期 石橋俊一》

驚愕的事態が発生した。それは周知の通り、ロシアがウクライナへ侵攻したことである。私は去る4月に”米寿”を迎えた。三歳の時、左足の向う脛を打撲したことで”骨髄炎”となり、左足は着けず両松葉杖で歩行する身となった。故郷・鹿児島で小学校5年生（10歳）の2学期の8月15日に太平洋戦争が終結したが、その間、担任の先生や先輩の皆さん、近所の叔父さんたちが召集され、「万歳！万歳！」と見送り、数年後に遺骨を迎えるという体験をした。従兄が終戦により復員し、職場復職後の初月給で卓球用具を買ってくれたことで学校へ持って行き練習を始めたことで左足に筋力がつき単独歩行ができるようになり、中学・高校では卓球部をつくり部長として活動した。そして将来を考え上京し、国立身体障害者更生指導所（東京都戸山町＝以下指導所）に入所、職業訓練に励む最中に日本社会事業短期大学生で実習に来ていた白沢久一先輩（佐野高校出身）と出会い、社会福祉（障害者福祉論）を学ぶ学校があることを知り、受験し合格して入学。2年生の時に4年制大学が開校されたことから、二年次に編入、学部一期生として卒業。この時の先生方を私は「第一世代の先生たち」と呼んでいた。それは、仲村優一・鷺谷善教・小川政亮・小川利夫・吉田久一先生などで、ほとんどの先生方は兵役の体験者であることからであった。勿論、中学・高校時代の先

生方、指導所の職員の皆さんも三分の二は兵役の体験者であった。その延長線上に私の人生観が培われた。大学卒業後、全国社会福祉協議会へ就職し担当したのが、障害児者関係の全国組織化であった。そこで出会ったのが、当時医学的に定義できない障害児が“重複欠陥児”などと呼ばれ、後に「重症心身障害児」と社会的に名づけられたこの子どもたちに出会ったことで“命の尊さ”を自覚させられ、「全国重症心身障害児（者）を守る会」発足のお手伝いをする原動力となった。以後、「一人も漏れなく命を尊び、守ること」が私の生活信条として生きてきた。また、居住地の野木町で町障害者福祉会会長として40年代後半から18年間、地域福祉の充実・強化のために仲間と共に活動し、さらに、卓球を始めたことで単独歩行が可能になった実体験が栃木県身体障害者卓球連盟（現・栃木県障害者卓球連盟）を発足させ、去る7月3日には「第41回選手権大会」を開催することが出来た。そして、地域で共存・共生することを目標に知的障害者の皆さんと共に生きる場として社会福祉法人の認可を受け24年目を迎えている。その最中に起きたのが、冒頭のロシアがウクライナに侵攻し、両国の兵士の戦死に加えて、ウクライナ国民たちが年代を越えて殺傷されていることである。小中高、大学の同級生のほとんどが黄泉の国へ旅立っている中で、障害を持つ身ながら、“米寿”を迎えた嬉しさとは裏腹に、「人間とは何ぞや」と問いながら生活している昨今である。会員の皆様はいかがでしょう？



『映画「いのちの停車場」に関わって』

日本社会事業大学専門職大学院 教授

つるかめ診療所 副所長

鶴岡浩樹

下野市の在宅療養支援診療所と、専門職大学院の教員と、変わらず二足の草鞋の鶴岡です。栃木支部の同窓会に参加させていただいてから、会報が楽しみとなりました。去る2022年3月11日、第45回日本アカデミー賞授賞式に参加するという、おそらく人生最初で最後の体験を

しましたので、経緯を踏まえて報告します。きっかけは東映からの一本の留守電でした。富永理生子プロデューサーより在宅医療の取材依頼で、成島出監督、平松恵美子脚本家の3人が下野市に来られました。訪問診療に同行し、熱心に見学され、在宅医療に関わる映画をつくらうとしている話を伺いました。せっかくの来栃なので、小山市 ASMS の太田秀樹先生、自治医科大学附属病院長の佐田尚之先生も巡りました。2019年暮れ、コロナ禍前の話です。ほどなく映画「いのちの停車場」の台本が届き、医療的な側面から助言することとなりました。ですから、主演が吉永小百合さんで、西田敏行さん、広瀬すずさん、松坂桃李さ

ん等が出演すると聞かされた時は、目が点となりました。この映画は、吉永さん演じるベテラン救急医が、不祥事から実家の金沢に戻って在宅医に転身し、命と真摯に向き合いながら、医師として成長していく物語です。撮影の数か月前から東映撮影所に通い、スタッフと医療機器の確認を行い、俳優さん達には聴診、血圧測定、注射などの指導をさせていただきました。時はコロナ禍となり、舞台となる金沢での撮影が難しくなると、浮上したのが、栃木を金沢にしたてようというアイデアでした。映画人の豊かな発想には、もう驚きの連続でした。栃木市の巴波川のほりにこの映画の象徴ともいえる駐車場がつくられ、国栃に通学していた娘が「こんな立派なバス停あったっけ」と驚くほどリアルなセットでした。こうして一部の撮影が栃木などで行われ、私たち夫婦は現場の医療指導としても駆り出され、妻がメインでしたが、私も何度か現場に足を運びました。窓から患者宅に入るシーンなどは、当院の訪問同行からインスパイアされたようで、嬉しいことでした。成島組の現場は、数十人のスタッフがそれぞれの役割を任せられ動いており、成島監督率いる大艦隊のようでした。私も乗組員のひとりとなれたことを誇りに思っています。コロナ禍の中、なんとか撮影を終えると、今度は国際映画祭への出展です。まだ音楽等が入っていないフィルムの英語字幕をチェックするという細かい作業をしました。こうして出来上がった映画は、なんだか愛おしく、私は試写会も含めて 13 回も観てしまいました。不思議なもので、観る度に新たな発見があり、成島監督の緻密なづくりに感服しました。それだけに、北京国際映画祭で唯一の日本作品として選出されたことや、第 45 回日本アカデミー賞 7 部門受賞のニュースには心が躍りました。そして、ご縁がありまして、夫婦で日本アカデミー賞の授賞式に参列させていただきました。惜しくも最優秀賞には選ばれませんでした。今をときめく映画人を目の当たりにし、3.11 だけに控えめな授賞式だったとはいえ、夢のような 4 時間でした。吉永さんは銀幕のままの方で、その振る舞いは素敵で、撮影を通してのプロフェッショナルな姿勢には感動を覚えました。広瀬さんが、役作りで「大学の授業みたいなものを受けました」と答えたときは、グッときました。ちなみに今、下野新聞で連載している「いのちの十字路」は、この映画の続編です。重いテーマも含まれていますが、南杏子先生のこれらの作品は「自分らしく生きる」ことを根底に置いているような気がします。最後になりましたが、私も医師役で映画に一瞬出演しました。エンドロールには日本社会事業大学の文字も出てきます。機会がありましたら、是非ご覧になってください。

訃報

石月宏忠顧問（研究科 7 期） 令和 4 年 5 月逝去

山崎正志副会長（学部 14 期） 令和 4 年 4 月逝去

お二人とも日本社会事業大学、ならびに同窓会活動に永年ご貢献いただきました。感謝申し上げますとともにご冥福をお祈り申し上げます。

『それすらもなお猫の日々』

《学部 34 期生 菊池 浩史》

5 年ほど前に我が家にもらわれてきた元捨て猫「みるく」と「ここあ」。みるくは甘えん坊で、ここあはツンデレ。みるくとともに起き、みるくとともに寝る。ここあと目が合えばおっかけっこが始まる。



「みるく」



「ここあ」

以前メンタリストのDAIGOが、「生活保護にお金使うなら猫の命を助けてほしい」と言って大炎上しました。ソーシャルワーカーの端くれとして、決して言うてはならぬ言葉ですが、「わからなくもない」というのが本音のおいらです。

子育ても終わり、妻との会話の半分以上が猫のことという、平凡ながら幸せな日々のがたさ。

編集後記

石月さんと山崎さんが相次いで亡くなりました。石月さんとはあまりお話する機会はありませんでしたが、社大の黎明期を知り、栃木県の福祉行政の礎を築かれた偉大なる大先輩でした。お年を感じさせない、ダンディズムを漂わせた紳士でいらっしゃいました。

山崎さんは社大のワンダーフォーゲル部を創設され、ワンゲル OB 会の会長もお務めでした。ワンゲル出身の私としては二重にお世話になった先輩でいらっしゃいました。県社協の福祉人材センター在籍時は、担当地区が私の職場のある地域であったため、時々ふらりとお立ち寄りになり、近況など聞かせていただいたのも懐かしい思い出です。お二人のご冥福をお祈り申し上げます。

先日の総会で会長の交代が行われました。岩崎前会長は、厚労省にも顔の利く全国区の要人でいらっしゃいますが、少しも偉ぶるところがなく、事務局にもいつも大変気を遣っていらっしゃいました。メールでの相談事への対応も即！という感じで、さすがに一代で県内有数の法人を立ち上げた方は違うものだといつも感心させられることしきりでした。

さて、新会長は檜山さんです。県庁で各福祉部署を歴任されただけあり、福祉行政の実務には大変精通されています。

同窓会も、会員の高齢化と減少、新会員が増加しない、参加者の固定化などさまざまな課題を抱えております。

事務局といたしましても、新会長とともに同窓会の発展に奮闘する所存でありますので、会員の皆さま方にも同窓会の新体制にどうぞご協力をいただきますようお願い申し上げます。